

思い出の歴史紀行 (一乗谷から会津若松まで) 2019年夏の旅

2. 黙照の修行場「永平寺」

一乗谷から北へ山を一つ越えると永平寺に出ます。言わずと知れた曹洞宗の総本山にして、一大道場です。実は我が家の直接の檀家寺はもともと永平寺でした。と言っても別に我が家のルーツが越前というわけでも、開祖道元禅師にゆかりがあるわけでもありません。戦前の日本統治時代の嘉儀という町に、永平寺が布教所を建てて同じ宗旨の日本人の安心立命に寄与していました。わたしの父方の祖父の家族は明治維新直後に長崎県諫早市から台湾に移住し、その嘉儀という町に暮らしており、故郷の檀家寺のご縁でその布教所に帰依していたというわけです。

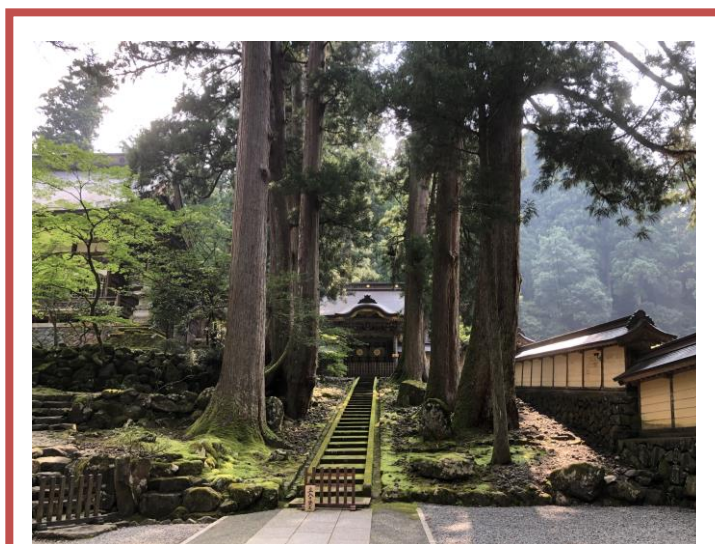
1990年代、わたしが仕事で台湾に行った時にはまだ、無人ながら祖父母の暮らしていた家が残っていましたし、街の中心部には父の生まれた病院が戦前のままの姿で運営されていました。永平寺の布教所の跡も地元の人が住んでいましたが、日本風の建物の雰囲気そのまま残っていました。台湾もその後大きく発展し、今ではすべて面影さえなくなってしまいましたし、病院も見違えるほど大きく近代的な建物になっていました。祖父母の埋葬されたという日本人墓地もすっかり様変わりして、台湾様式の亀甲墓の立ち並ぶ墓地になっていました。

わたしの永平寺や曹洞宗への知識は高校生の時に習った日本史の世界から少しも進んでいません。永平寺は1243年に道元禅師がこの地を修行場として定めてから約七百年の歴史を刻む寺です。

道元はそれまでの傘松峰大佛寺を1246年に吉祥山永平寺という名に改めました。その寺号の由来は中国に初めて仏法が伝来した当時の中国の元号「永平」であり、意味は文字通り「恒久平和」ということだそうです。

ところでわたしの高校日本史的知識では鎌倉時代は仏教の刷新期で、鎌倉幕府成立（1192年）前の1175年の法然による浄土宗を皮切りに、1194年には中国で臨済禅を修めた栄西によって

臨済宗が生まれ、1226年に中国曹洞宗を修めた道元が宋から帰国しました。1252年には日蓮が比叡山を降りて法華宗（のちの日蓮宗）を開き、一遍が踊念仏で阿弥陀仏信仰（時宗）を唱え始めたのが1274年、真宗（浄土真宗）に至っては宗祖親鸞が入滅してから60年以上もたった1321年に本願寺という名前が歴史に登場しています。これ



永平寺はほぼ全伽藍が国の重要文化財に指定されていますが、この唐門は勅使が来た時だけ開かれる勅使門として天保年間に再建されました。美しい中に荘厳な雰囲気漂う建築物で、緑の多い字息の中でも特に涼やかです。へその曲がったわたしは、正面の山門や正殿と言われる本堂よりも、この唐門の方が気に入っています。

思い出の歴史紀行 (一乗谷から会津若松まで) 2019年夏の旅

らの6宗派を総じて鎌倉仏教と習いました。

ついでにそれぞれの開祖の生没年を比べてみると、一番早く生まれているのが法然で1133年～1212年(79歳)、それから栄西1141年～1215年(74歳)、親鸞1173年～1262年(89歳)、道元1200年～1253年(53歳)、日蓮1222年～1282年(60歳)、一遍1239年～1289年(50歳)と続きます。こうしてみると、京都を追われ豪雪地帯である越前で修行三昧に暮らした道元と、流浪の旅を生涯送らざるを得なかった一遍が早く亡くなっているのは、やはり生活環境が影響している

のではないかと考えてしまいます。

わたしは長男ですから家の宗旨を守っています。しかし、この6人の中で一番親しみを感じているのは、実は親鸞です。歎異抄はよく読みますが、真宗中興の祖、蓮如の御文も心にしみます。戦国時代に蓮如によって広められ当時は一向宗と呼ばれていた真宗(現浄土真宗)と、フランシスコ・ザビエルが布教したイエズス会派キリスト教が、どちらも瞬間に庶民の間に信者を増やして強固な信仰集団を形成し、どちらもが権力に歯向かい厳しい弾圧を受けたのも、どこか共通点があるように感じるのはわたしだけでしょうか。

その点、ここ永平寺を訪れるたびに思うことは開祖道元はどうゆう人だっ



手前が山門、一番奥が道元の修行のための本堂、法堂、その下の少し小さい屋根がご本山大日如来が安置されている仏堂です。寺全体が鬱蒼した森に囲まれ静まり返っています。若い修行僧たちが大勢、それぞれの日常の役割にいそんでいるのですが、物音ひとつ聞こえてきませんでした。

たかということです。寺域全体からも伽藍のそれぞれの建物の佇まいからも、厳かさを感じると同時に何物をも包み込んでしまおうという、無尽蔵な空間の広がりを感じます。同じ禅宗でも栄西が開いた臨済宗では師と弟子による「公安問答」によって悟りを開こうとするのに対して、道元の曹洞宗ではただひたすらに坐禅を組むこと(只管打座)によって、悟りを開くのだそうです。そういえば坐禅を組む時も臨済宗では壁を背にして



こちらが正門にあたる山門です。小ぶりですが重厚であり、同時に自然に溶け込んだ優美な姿をしています。

思い出の歴史紀行

(一乗谷から会津若松まで)

2019年夏の旅

坐るのに対して、曹洞宗では壁に向かって坐ります。まさに面壁九年の達磨大師ですね。門外漢で注意欠陥多動症のわたしには、ただ黙って壁に向かって坐っている道元の黙照禅よりも、子弟間でQ&A（問答）のできる臨濟禅の方が親しみが持てますが、そんなことを言ったら、それこそ道元禅師に「喝っ」と一喝されそうです。

江戸期以前の大寺院は戦の時の城郭の役割を果たすよう配置、設計されていると言われています。開祖がどんなに偉大な人物でも僧侶ですから、誰か有力者の庇護と支援がなければ寺の建立どころか宗教活動さえままならなかったはずです。そういう目で見ると谷の奥の回廊さえ階段状に作らざるを得ないほどの傾斜地を選んで建てられている永平寺は、守るに易く攻めるに難いという城郭の条件をクリアしています。しかし、山一つ隔てた一乗谷が戦場となり二度も焼き払われた時でさえ、永平寺は平穩無事だったのです。そのこともまた、この緑鬱蒼とした大寺院に不思議な存在感を感じさせる所以なのかもしれません。

そういえば、12世紀から13世紀にかけて約100年ほどの間に、立て続けに鎌倉仏教が生まれ、しかも今日まで隆々とした宗派を気付き上げたのは何故でしょう。鎌倉時代が日本史上の大きなエポックであったことは理解できますが、どうしてそれが精神世界である仏教の隆盛につながったのか、不思議ではないでしょうか。そんな謎を皆さんと一緒に解き明かしていければ、また楽しいのではないかと期待しているところです。